

## ドクターインタビュー

## 菊池 新(きくち あらた)先生

医療法人社団 慶新会 菊池皮膚科

菊池先生は、慶應義塾大学病院、アメリカ国立衛生研究所(NIH)にて皮膚免疫学を研究され、平成10年5月に帰国して菊池皮膚科医院をご開院。クリニックは患者さんの立場で納得のいく丁寧な診療と専門的な皮膚科情報の提供を目的とされておられます。また「金属アレルギー」にご造詣が深いとお聞きしておりますので、ぜひともアトピーと金属アレルギーについてお聞かせ下さい。

——「金属アレルギー」の症状について詳しく教えてください。

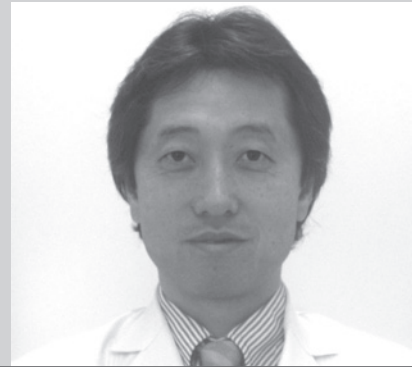
「金属アレルギー」は、最近明らかになってきた新しい概念で、まだまだわからないことも多い分野です。ピアスやネックレスをして汗をかくとその部位がかぶれるという経験がある方はおられるでしょう。金属は汗などと接触すると溶け出してイオン化し、皮膚や血液中のたんぱく質と結合します。その複合体は体内で異物として認識され、免疫システムがこれに対してアレルギー反応を起こすと、皮膚にかゆみをともなった炎症が起こります。これが金属アレルギーです。アクセサリなど身につけるものでかぶれるだけなら、それをつけさえしなければよいのですが、全身性の金属アレルギーという治りにくい病態を起こすと非常に厄介です。最も問題になるのは、歯科治療で入れた口腔内の金属で、これらが溶け出して腸で吸収されると、手足に湿疹や水疱などを生じたり、体中にかゆいしこりができたりするのです。金属を入れてから5~10年も経ってからこのような症状がでることがあるので注意が必要です。また若いうちからピアスをするのは、全身性の金属アレルギーの発症時期を早めることになるので、できれば避けた方がよいでしょう。

——先生は治療で歯医者さんとの連携をされておられるとのことですが、きっかけなどございますか？

私が米国留学から帰国直後の15、6年前も、歯の治療で使用した金属によって生じる「金属アレルギー」という疾患概念はありましたが、今に比べるとかなり認知度が低かったのです。ですから、歯科医の先生もなかなか協力してくれませんでした。私が検査して金属アレルギーを指摘しても、「そんな病気はない」とか「皮膚より弱い粘膜に出ないのに遠く離れた手に湿疹が出るはずはない」とか言ってきちんと対処してくれない歯科医がほとんどでした。それを知り合いの大学病院勤務の矯正専門の先生に相談したら、近くでちゃんと対応してくれる開業の先生を紹介してくれました。今では週に何人もの金属アレルギーの新患をその先生以外の施設で紹介して、金属をなくすようお願いしても、きちんと対応してくれるようになりました。もちろん、患者さんによっては老人で体力的に治療ができないとか経済的に難しいとか、うまくいかないケースも多いことがわかりました。そういう場合、理想はメタルフリーですが、摩擦の早い金属だけ取ってみるとか、出来るだけ本数を減らす方向で指導していきます。金属アレルギーがある場合、歯の治療を始めると徐々に効果が出てきます。1,2本金属歯を治療しただけで、治ってしまう方もいれば、10本治療してもなかなか治らない患者さんもいます。金属はすぐには体から抜けにくいので、金属が長期間かつ多数口腔内に入っていた方ほど治りにくい傾向があります。

——アトピー性皮膚炎患者さんの金属アレルギーを疑われる場合について、お聞かせください。

金属アレルギーとアトピーでは発疹のパターンが基本的には違います。よくあるのは、「小さい頃はアトピーでひじやひざの裏に発疹が集中的に出ていたけど、この頃違う場所に違う形の発疹がでる」というケースです。そういう時はアトピーの検査だけではなく、金属アレルギーの検査も並行して行います。アトピーが治まっても、若い頃入れた金属歯の影響で金属アレルギーが10年後に出てくる場合もよくあるので、そういう時はアトピーの治療だけをしていても治らなくて当然です。ですからアトピーという固定観念だけで診ないで、それ以外の金属アレルギーや洗剤のかぶれの合併なども視野に入れ、患者さんの症状全体を診ないといけません。アトピー自体は落ち着いているのに、アレルギー体質であるために他のアレルギーも併発することはよくあります。金属アレルギーは血液検査ではわかりませんから、金属アレルギーのパッチテストも行い、陽性所見が出る人は歯の治療も必要なのです。



菊池 新(きくち あらた)先生のプロフィール

- 1987年 慶應義塾大学医学部卒業
  - 1991年 慶應義塾大学医学部皮膚科学教室入局
  - 1995年 同皮膚科学教室医局長、研修担当主任
  - 1995年 同皮膚科診療科医長
  - 1996年 アメリカ国立衛生研究所(National Institute of Health)へ留学
  - 1998年 留学を終え帰国、菊池皮膚科医院開業、現在に至る
- 日本皮膚科学会認定専門医・指導医  
日本医師会・日本医学会認定医  
医学博士

——アトピー性皮膚炎患者さんに金属アレルギーがあった場合の日常生活の注意点を教えてください。

全身性の金属アレルギーが疑われる場合は、そのほとんどは口の中の金属が原因です。具体的には、金属冠や矯正器具、入れ歯の金具などが疑われます。重要なことは金属を仮に完全に除去できなくても、出来るだけ減らすこと、それも無理なら溶けないように工夫をすることです。歯周病、歯槽膿腫、扁桃腺の腫れ、喫煙など、口腔内の衛生状態が悪い場合には金属は溶けやすくなり、金属アレルギーを起こしやすくなります。そういう人は金属アレルギーのみならず、病巣感染という病態も合併し、蕁麻疹なども起こしやすくなります。この症状は、口腔内の衛生環境をきれいにするだけでも改善することもしばしばあります。ですからアトピーの患者さんは口腔内の衛生環境にも日ごろから十分注意を払いましょう。また、食べ物によっては多くの金属が含まれているものもあるので、それらの摂取をできるだけ避けてもらう。コーヒーやお茶を飲みすぎたり、チョコレートを食べたり、缶コーヒーや缶ジュースなどを多く飲んでいないかなどを細かくチェックし、それらをできるだけ減らす指導もしています。

——最後にアトピー性皮膚炎の患者さんにメッセージをお願いします。

毎日200人前後の患者さんを診察していると思うのは、仮に100人のアトピー患者さんがいれば治療方針も100通りだということです。患者さんの性別、年齢、職業、その他の背景を考慮して一人ひとり治療方針を決めなくてはなりません。すべての病気には何らかの原因があるのだということを知って置いてください。アトピーにも金属アレルギーにも原因があってその結果が皮膚にでているわけですから、それがずっと治らないということは、原因に対する対策が足りていないということ。そこに目を向けていけば必ず良くなります。私が目指しているアトピー治療の目標はIgE値を正常にすることではなく、症状が出た時に病院にすればすぐに治まる程度の症状にする、学生や社会人の患者さんならば、まわりの他の人となら生活の質に遜色なく、日々を過ごせる状態です。原因を1/10にすれば症状も1/10になります。アトピーには、金属アレルギーがからみ、洗剤にかぶれが重なることも多いのです。もちろんストレスは重要な悪化因子で、精神的影響も排除していかなくてはなりません。信頼できる主治医をみつけて、今の状況を一緒に考えてもらうことが重要です。魔法の薬はないので、原因対策をきちんと考え、最終的には保湿剤の外用程度で維持していくことができるようになるまで、頑張ってください。

——本日は貴重なお話、ありがとうございました。